



リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 矢作川水系のカメたち
- 矢作川観察ノート(17)
五六川の川ガキたち
- 石 その参
- 着任挨拶
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

4
2002 April
No.48

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

矢作川水系の カメたち

矢部 隆

アカミミガメ

まず日本列島に分布する主なカメについて紹介しましょう。ニホンイシガメ(以下イシガメ)は本州、四国、九州に固有のカメで、世界的に見ると極東の一面にしか分布していない非常に珍しいカメといえます。クサガメは日本の本州、四国、九州、および朝鮮半島、中国、台湾に分布しています。スッポンは本州、四国、九州、琉球列島、国外では朝鮮、台湾、中国、海南島、インドシナ北部、モンゴル、ハワイなどに分布しています。最近野生化が著しいミシシッピーアカミミガメ(以下アカミミガメ)は北米のミシシッピー川下流域が原産で、30年ほど前から幼体が「ミドリガメ」という商品名で愛玩動物として大量に流通しています。正確な資料はありませんが、日本には1年間に100万頭前後が輸入されているとも言われています。

アカミミガメは明らかに外来種ですが、スッポンは食用となるために養殖されたり頻繁に流通されたりする機会が多く、クサガメも国内で養殖された子ガメや中国から輸入された個体が愛玩動物として大量に市場に出回っており、飼育中に逃げ出したり、飼い切れなくなって野外に放逐されたりしています。したがって



スッポンやクサガメについては土着か移入かがはっきりしない地域がたくさんありますし、在来の個体と他所から持ち込まれた個体が混在している場所もあるようです。オオクチバスやブルーギル、ヌートリアなどの例からわかるように、外来生物は在来の生物や生態系に悪影響を与えることが多いですから、注意が必要です。

イシガメは平地の河川や湿地でも見られますが、おもに山麓部の谷川や池沼に生息しており、溪流とか林道、山林の中など、意外なところで出くわすこともあります。それに対してクサガメやスッポン、アカミミガメはどちらかというと水底が砂や泥である平野部の池や川で生活しています。

愛知県の東三河地方ではカメの分布が詳しく調べられており、渥美半島や豊川水系ではイシガメが最も多く、次いでアカミミガメが見られ、クサガメも少数で



イシガメ



まえた私のところに持ってきてくれるカメはすべてイシガメです。

ところが、豊田市岩倉町のフォレスタヒルズでは事情が異なっていました。ナチュラルリストでミュージシャンの前澤勝典氏と私とで1999年以来、フォレスタヒルズの中の2つの池のカメの標識再捕獲調査をしています。これまでに26頭の個体識別をしており、そのうちの20頭がイシガメで、6頭がアカミミガメでした。アカミミガメはオス・メスともに成体が見つかっていますし、甲長5センチほどの幼体が池で数個体観察されていますので、すでに繁殖している可能性が高いです。フォレスタヒルズにはリゾート施設への来客が多いので、ここのアカミミガメはもともと人によって放逐されたものでしょう。

豊田市よりも矢作川の下流域である岡崎市や安城市、西尾市からはまだ断片的な情報しかありませんが、アカミミガメが見られる頻度がより高くなり、クサガメも見られるようになります。ただ、西尾市の^{かれきのみや}枯木宮貝塚、熊子第2号遺跡、清水遺跡から出土した遺体のカメはすべてイシガメでしたから、クサガメがどのような経緯で矢作川下流域に定着したのかについては詳細な研究で明らかにする必要があります。

矢作川水系のカメたちの生活は、水質汚染や河川改修やため池の埋め立て、あるいは外来種の放逐などによって大きく変わりつつあります。カメたちへのそのような影響を念頭に置きつつ、矢作川水系の下流部から上流部までの総合的なカメの調査が市民の方々も関わりつつ進んでいけば、と思います。

(やべ たかし、

愛知学泉大学コミュニティ政策学部 助教授)

はありますが生息しています。一方、尾張地方で最もよく見られるのはクサガメです。三河地方は丘陵地で尾張地方が低地であることを反映しているのでしょうか？ それとも分布を決める何か他の要因があるのでしょうか？

さて、それでは矢作川水系にはどんなカメが棲んでいるのでしょうか？

昨年(2001年)の夏に、豊田市の保見ヶ丘と本徳町の山麓部にある4個のため池にわなをかけて、そこに棲んでいるカメを調べました。保見ヶ丘の池は伊保川に、本徳町の池は^{かご}籠川に繋がっており、これらの川はいずれも矢作川の支流となっています。あまり多くはありませんが計10頭のカメを捕獲し、それらはすべてイシガメでした。また私が住んでいる松平地区にはやはり矢作川の支流である巴川が流れていますが、この川に散歩に行き観察したり、私がカメの研究をしていることを知っている近所の人たちがこの川で捕

矢作川観察ノート(17)

五六川の川ガキたち

新見 幾男

私の生まれ在郷は豊田市東梅坪町8丁目だが、昔は^{こま}挙母市大字梅坪字高宮と言った。名鉄三河線の電車の駅でいうと、今の豊田市駅より一つ北の梅坪駅の近くの部落だ。

その高宮部落の裏側に、セダタ川という小川が流れていた。女性たちが子どものおしめを洗濯したり食器を洗ったりする川だったから、魚が無性に多かった。

セダタ川は往還(今の国道419号)の下をくぐっていた。そのトンネルの中をカイボリして、魚を大バケ

ツにいっぱいも獲ったことがある。思わぬ大漁だったので、50年以上も前のことをよく覚えているのだ。

カイボリは「掻い掘り」のことで、川の土手を切って水を田んぼの中へ廻し、水の無くなった川の魚を根こそぎ捕まえるような漁のことだ。そういうことをする子どものことを「あいつはボンツクだ」と言い、カイボリの行為自体のこともボンツクと言っていた。

当時は「川ガキ」とは誰も言わなかった。ボンツクは川ガキの元祖のようなものだろう。昔は大人のボン

ツクも随分といたが、川の土手を切るような悪さは、小ボンツクしかやらなかった。

高宮部落の裏にセドタという田んぼがあり、その中を流れる小川だから、そのことをセドタ川とか、単にセドタとか呼んだのだろう。背戸田川だろうか。

セドタ川を下って隣り部落に入ると、川が少し大きくなり、そこはもうジンソウ川だった。さらに下るとアエン川になり、今の豊田の都心部を流れて、矢作川へ流れていた。ジンソウ川の漢字書きは今も知らないが、大人になってからアエン川は安永川の訛りであることを知った。

梅坪の子どもたちは、みんなセドタ川やジンソウ川で泳ぎを覚え、ボンツクもやれるようになった。そのあとに大川（矢作川）の支流のカゴ川（籠川）や新川（枝下用水）へ行けるようになり、さらにそのあとでないと、大川へ一人で釣りに行くことはできなかった。ボンツクをするにも水泳を覚えるにも、そういう順序らしきものがあつたように思われる。

今の豊田の都心部あたりのことを、当時の梅坪人は「拳母の街」だとか、単に「街」だとか言っていた。梅坪の子どもも拳母小学校へ行っていたから、私たちは街のことはわりとよく知っていた。

今でもそうだが、豊田市都心部は盆地の底のような低地であり、当時は水郷地帯のような街だった。梅坪は街の北方にある農村部落だったから、梅坪の小川はみんな南に向いて街へ流れていた。

梅坪から拳母小学校へ向かう通学路の脇は深い沼田だった。そこから一本の小川が流れ出て、街へ向かっていたが、今思うと、あれがゴロク（五六川）の源流だったのだろう。ゴロクも安永川を経て矢作川へ流れていく、無数の小川の一つだった。

街の友人たちが「ゴロク」と発音するとき、いかにも懐かしげであるから、ゴロクはセドタ川やジンソウ川と同様に、魚がいっぱいた美しい小川だったのだろう。昔のゴロクを知っている人が、拳母の街にはまだたくさんいるのである。

私が高校生になった頃には、安永川もその支川の小川も、コンクリートの排水路や地中の暗渠に変わっていた。それよりかなり遅れて、梅坪の小川は徹底的に暗渠化された。地上に川はない。そういう事情だから、まず小川でボンツクや泳ぎを覚えるなどという順序や習慣は、もうすっかり忘れられてしまった。

6年前、豊田都心の小運動公園（1.9ヘクタール）のような存在だった市営・児ノ口公園が徹底的に近自然化された。

近くの幼稚園から五六川へ集団で遊びに来た川ガキの「予備軍」たち。ほんものの川ガキは個人で来て魚を獲っていく。

そのとき、あの五六川が公園内の区間216メートル分だけ地上化され、そこに地下水や矢作川本流の水が導入された。ゴロクが再生されたのである。すぐに魚や蛙、ザリガニ、野鳥たちが戻ってきた。ホタル繁殖の仕事も始まった。

一昨年の夏、再生されたゴロクでシラハエの自然産卵風景を見た。とにかく小魚が増えた。驚いたことには、ボンツク、つまり川ガキたちまでが、魚と一緒にゴロクに戻ってきた。美しい安全な小川があり、そこに魚がおれば、子どもは川に来るものだ。「子どもは川を破壊する天才でもある」ということで、ゴロクでのボンツクは禁止されたが、そんな禁則に負けるようではボンツクではないし、管理人たちもボンツクだから、小ボンツクとの共棲方法を考え出すに違いない。

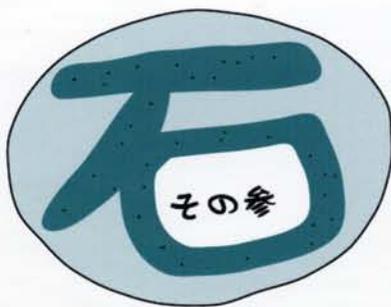
矢作川「川会議」の12団体が「子どもを川に戻す」ことを目的に、今年5月に「矢作川学校」を開校する。息子のKと酒を飲んでいたとき、矢作川学校の釣り指導の話が出た。Kは「子どもが川に戻るのは釣りからじゃない。ボンツクから入ろう！」と言った。私より子どもに近い年齢のKの直観的判断の方が正しそうだ。

個々に釣技を「指導」して子どもを川に戻すだけではハカがいかない。美しく安全な小川を再生し、魚を増やせば、その魅力に子どもの天性が負ける。子どもは「指導」しなくても「自然」に川に集まってくる。

そのことを「五六川の川ガキたち」が証明すれば、児ノ口公園の近自然化以降は頓挫したままの市街地河川の活性化事業が、再スタートするかもしれない。矢作川水系の各種魚類を人工繁殖で大量復活させようとしている「淡水魚種苗センター」計画にも、弾みがつくかもしれない。川ガキたちを「川の生物の貴重種」とでも思えるような認識が普及すれば、すべてがうまく回転していくように思われるが、どうであろうか。

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長）





河合良三

川づくりのよさは自然石を使った石積みにあるのではないだろうか。自然が豊かな川は、自然石の石積みによって決まる。そこにこそ、川づくりの石積みの重要性が見えてくる。

私は常にそう思っています。

石積みの技術は、古くは古墳時代の石室の石積み、奈良時代には最近話題になった齋明天皇の宮殿の石積みや大阪狭山池の堤・朝鮮式山城の神護石に、鎌倉時代には元寇の防塁が見られます。

室町時代には生活に密着した井戸のほか、川や水路の護岸、水田、堤などあちこちに発見されますが、これらはまだまだ石積みと呼べるものではありません。



野面積み 安土城の石垣

一般的な石積みを石垣技術に高めたのは寺院の力だと考えられています。寺院では瓦葺の大きな屋根の建物が必要なため、しっかりした基礎が必要だったからでしょう。

これらの技術の蓄積により、石積みの技術は、信長の安土城築城によって開花し、秀吉の天下統一による築城政策とともに全国に展開し、そして、江戸時代になって、今私たちが眼にする完成した城郭の石垣となったのです。城郭の石垣は時代の古い順から野面石積み、打ち込みハギ、切り込みハギなどの石積みがあります。

野面石積みの石垣は、戦国時代後半から安土桃山時代に築かれた城に多く、例えば安土城に見られるように自然石を何も加工しないでそのまま積み上げられた石垣で、城郭に使用される石積みとしては初期のころの石垣です。

打ち込みハギの石垣は、安土桃山時代から江戸時代



打ち込みハギ 伊賀上野城の石垣

初期にかけて築かれた城に多く見られ、例えば伊賀上野城のように、自然石をある程度加工して積み上げられた石垣で、技術的に進歩が著しく、城郭の石垣としては最盛期のころのものです。

切り込みハギの石垣は、江戸城に見られるように石材は方形に完全に加工され、間隙なく、積み上げられています。この技術は江戸時代中期以降に多く見られます。この時期は石垣建造の需要がどんどん低下した時代で事例は多くありませんが、石積みの技術は体系的に完成され、多くの技術書が残されています。

この他に各地域に特色のある玉石積み・間地布積み・間地谷積み・亀甲積み・乱れ積み等があります。

ところで、最近の川づくりは環境・景観・水辺の生物や植物の面から多くの研究がなされていますが、小動物の生息空間をつくったり、瀬・淵をつくったり、また景色の中に溶け込みやすい自然石を使った石積みの技術が川づくりにあまり生かされていません。

日本の伝統的な石積みの技術を神社仏閣・城郭の歴史上の史跡としてのみ残すのではなく、自然の豊かな川を作るために、川づくりに取り入れる必要があると思います。

西日本技術研究所の福留さんが提唱している川づくりの石積みの技術を次回紹介したいと思います。

(かわい りょうぞう、

愛知県衣浦港工事事務所 岡崎出張所 所長)



切り込みハギ 江戸城天主台の石垣



着任挨拶

間野隆裕



ソメイヨシノの開花、昆虫類の活動など春の訪れを感じる素晴らしい季節となりました。私はこの4月より総括研究員として着任することになりました、間野と申します。

本研究所にはこれまで共同研究員として数

年間昆虫（特にガ類）の調査に携わり、その結果を年次報告書にも発表させていただきました。昆虫類の中でもガ類は種類数が極めて多く、多様な環境に多様な種類が生息します。これまでの豊田市域を中心とする矢作川中流域の調査では、河川環境に7百数十種のガ類が生息することが判明しました。この数は都市を流れる河川の中流域の環境としてはかなり多く、矢作川の自然環境の多様性の高さとそれに伴う生物相の豊かさを物語っているといえるでしょう。

人間は古代よりさまざまな形で自然と係わり、多くの恩恵に浴してきました。文明が発達するにつれその

生活パターンの変化と生活空間の拡大が起こり、次第に自然環境が狭められると共に自然との接点が薄れていきました。しかし近年、生物多様性条約締結、希少生物保全のためのレッドデータブック作成など自然環境保全が見直されてきました。その保全が叫ばれているいわゆる里山は、もともと人間の働きかけによって維持され、そのおかげで多様な環境、多様な生物が生息する空間となったものでした。自然とともに歩んできた人間には、本来心の潤いとしても潜在的になくはならないものなのです。

矢作川とその流域に見られる里山的な自然環境は、私たち全ての財産であり、この財産を理解した上で地域に有形無形の還元をし活用することは、非常に有意義なことと思います。

本誌『Rio』もNo.36/37からカラー印刷となり、読者への情報量が格段に多くなりました。本研究所が関連する行政・諸団体や個人の絶大なるバックアップの下、活動がますます活性化し、潤いのある街づくり、地域づくりに貢献していくことを願っております。

(まの たかひろ、豊田市矢作川研究所 総括研究員)

今月の一枚



矢作川の桜

〜百々貯木場から矢作川を望む〜

(二〇〇一年四月九日 横井恭夫氏 撮影)

研究所の 調査風景

また何十年もかかることでしょう。何とも言えない脱力感に襲われたというのが正直な感想でした。(洲崎)

3月11日(月)~12日(火)

いい川・いい川づくり研究会の第2回現地研究会が、昨年5月に第4回川の日ワークショップでグランプリに輝いた矢作川を舞台に行われました。一行は、古岸水辺公園・お釣土場水辺公園・児ノ口公園を視察した感想をもとに、『いい川』について意見交換をしました。(山本)

2月26日(火)

豊田市河川課で今年度、整備と同時に景観設計を行っている市内宮町の丸藪池を久しぶりに見に行きました。驚いたのは2つの池をとりまくイチイガシ林とコナラ林が、場所によってほとんど伐採されていたことです。この日と昨年5月にほぼ同じ場所(丸藪池・上池北側)で撮った写真を見ると、イチイガシの大木の林が見る影もなくなってしまうのが分かります。工事のため仕方がなかったとのことですが、いずれも面積は小さいとはいえ、高さ十数メートルの高木の繁る林で、同じような景観に戻るには



丸藪池 (01.5.17撮影)



丸藪池 (02.2.26撮影)



研究会での意見交換



おしらせ

2001年度に収集した矢作川の資料を編集し、『矢作川100年誌資料研究 第1集』を発刊しました。本書は、矢作川流域の人と自然の関わりを研究するための基礎資料集です。今後、さらにあらたな資料を収集し続刊を編集していく予定にしています。本書は『矢作川100年誌』編纂のための検討資料という位置づけですのでみなさんにお配りするだけの部数を印刷していません。研究所や豊田市中心図書館に置かせていただきますので、内容についてお気づきの点や感想などお寄せいただければ幸いです。(問い合わせ：豊田市矢作川研究所 小川都)



わあ 大きい!

2002年2月9日に豊田市上高町で捕獲されたイノシシ。

体重110kg(♂)
梅村尊二氏撮影



編集後記

春の訪れとともに、研究所のメンバーの顔ぶれも変化しました。今年1月の松武所長に引き続き、今月から新総括研究員に間野隆裕さんが着任しました。創立以来、総括研究員として研究所を支えてきた田中番さんは、今後、研究顧問となります。研究所はこのようなパワーアップした組織体制で新しい季節を迎えています。(内)

ご意見・ご感想をお寄せください

Rioは再生紙(100%)を使用しています